

美術科教育学会通信

1995年2月15日発行：美術科教育学会本部事務局
〒184 東京都小金井市貫井北町4丁目1-1 東京学芸大学 美術科教育学研究室内
TEL. 0423-25-2111 (内) 2856, 2857, 2858 FAX. 0423-21-3695

No. 16

わたしたちの「学会」について

山木 朝彦（大分大学教育学部）

およそ学会という言葉には、「学会」と称するだけで、その目的は学術の発展に関与するものであるということ、労せずして認めさせてしまう不思議な響きがかもっている。そこに幾多の怪しい学会が自称する余地も存在する。研究会と自称する程度の奥床しさを忘れずに、良い仕事をしている学術的な組織があることを想えば、制度としての学会の特色はどこにあるのかを考える必要が生じよう。

まず第一に考えられることは、研究と組織との関連性について自覚的であるのが社会的に認知されるに足る学会であると思う。学会を組織する会員の規定および特性と、そのことによっておのずから制約される学会の活動や社会的な役割についての認識、すなわち限界の自己確認が、この学会という組織が担わなければならない大きな責任である。美術科教育学会もまたその責任を担っていることは言うまでもない。

このことに関連して、美術科教育学会について、『全国学術研究総覧』（日本学術会議事務局監修・大蔵省発行）に掲載されている文章には、目的は「美術教育に関する研究協議を行い、美術教育の学術振興に資する」とあり、その目的はきわめて明快なように思われる。そして、創設経緯と沿革の項目には昭和58年を境目にそれまでの大学教官と大学院生を主たる会員にしていた組織が美術教育の研究を志す者すべてに解放されたことが記されている。

一般論として言えば、従来からアカデミックな研究組織として認められている大学を基底にしていた研究組織が、かなり幅広い研究者層に拡大された段階からは、あるいは、さらに会員数の拡大が進んだ現状の段階からは以前にも増して学術研究の基本の確認や、研究水準の価値尺度の明確化などの厳密化の方向を一層推進しなければならないわけだが、果たして、そのような一方向だけを模索してこの研究組織が有効に機能するだろうかという疑問を排するわけにはいかない。冒頭に記したとおり、会員の資質が変化するということは組織全体がその変化の状況に対応して変質することを意味しているわけだが、そのような変化への融通性や柔軟性がアカデミズムという紋切り型の概念だけで統御できる性質のものかどうか疑問であるといってもよい。

いや、むしろこう問うべきなのかもしれない。会員数や層の拡大が図られるとき、どのような変化が期待されるのか、あるいはどのような困難な問題が予想されるのか、このような問題意識なしに漫然と拡大＝発展というイメージに固執することは、本来の学会創設の必然性さえ、その質を問われかねないのではないかと。なぜならば、そこに、無自覚な楽観主義が潜んでいるからである。誰からも問われる余地を与えず、アカデミズムとは斯くありというような姿勢は問題外であるが、同時に、とりあえず、何か研究をしている人が増えれば美術教育の発展に資するという道理も成り立たない。（このように、感情的な起伏なしに叙述する姿勢は、懐疑的な態度と誤解されるかもしれないが、そうではない。

事実をできるだけ虚飾なしに整理してみたいだけである。)

もともと、美術教育の研究というコンセプトは、美術と教育という文化的な領域の関連性をめぐる多様な解釈の集合体ともいうべき状況を前提にしている。その多様な解釈が、おそらくハーバート・リードの近代主義的教育観や芸術観あたりを一種の精神的な拠り所にして美術に関する教育の普遍的な必要性のもとに結集し、美術教育の研究という自明性を支え合う結果に至っているのである。単純化すれば、美術教育について学習したり、関心をもったりした人々の関心の総意が現代の美術教育という学問領域を成立させている。従って、学会の活動の範囲が拡大し、会員数が増加すれば、研究する人間ひとりひとりが関心を持つ研究主題は多種多様になり、会員の学問上のバックボーンについてみれば、教育学、美学、心理学、美術批評、教科教育学（科研費では教育学とは別項目）、制作技法の研究など多岐にわたることになるであろう。従って、再び、大いに単純化していえば、美術教育の研究とは学問上、複合的な領域なのである。そして、様々な学問領域から応用可能なものならば何でも美術教育に持ち込めばよいといった根本的な錯誤に彩られたご都合主義の論述が生まれかねない危険性も、ここにある。

さて、いま述べたような状況は、歴史を重ねていけば、おのずと、もっと「しっくりした」美術教育研究のアイデンティティーが醸成されるというものでない。そのような変化は現在に至るまでの学会発展の経緯からみても、予想しえない。それでは、どのように考えればよいのだろうか。わたしは、学会の活動の拡大とは、すなわち活動の拡散（悪い意味ではなく）であり、会員の増加とは、様々な関心のもとへの求心力の多元化ないしダイナミックな拡散という運動を招来することになると思う。ふつう考えられるような意味での組織の拡大に伴う一元的求心力の増長とは異なる発展形態が繰り広げられて然るべきなのである。だから、学会で行われる研究全般にわたって、選出され委任された運営機構なり論文査読委員の集団なりが、「一元的」に責任を持つとしようとするような姿勢は、かえって、拡大する多種多様な資質に基づく研究を阻害しかねないのである。また、研究方法についても、他の教科教育の研究スタイルによく見られるように、心理学的な分析の形式にきわめて高い位置を与えたり、あるいは、美学の叙述スタイルにプライオリティーを与えたりするような方向は事実上、上記のような「一元化」を招くことになるに違いない。

しかしながら、各人、バラバラの研究が予定調和的に美術教育研究の総体にとって、視野の広さと奥行きを与えると考えることもできない。自らが学生・大学院生の頃に修めた研究分野だけに限らず、他分野の業績に注意を払う必要はあるだろう。そのとき、進化の系統樹のように、整然と整理された学問体系から出発することだけが問題への適切なアプローチではない。例えば、「情報論のための本棚」という小論（『人文科学の現在』人文会刊行）の中で粉川哲夫が述べるように、既製のジャンル意識を越えて文献と文献に関連の糸を結び付ける能力が必要とされる。いっばう、雑学的に様々な知識を披露したり、長大な文献から我田引水のために部分引用を繰り返す手法は、ベースとなる文献の文意から逸脱するノイズとなるので自戒すべきである。

有益生などというものを持ち出したら、研究をめぐるこうした論議はたちまち紛糾してしまうだろうが、その研究が自らの職業的な義務感だけを保証するようなルーティンワークにならないよう努める最低限の自覚は必要である。さらに、必要以上の引用文献や参考文献を揃えて、形式的な武装を整える必要もない。これらのことはひとりひとりが注意を払い、互いに改善の方向を探らなければならない問題であるが、もう一步踏み込んで、論文の形態に関わる問題と、審査の問題について若干述べてみたい。

すでに、ここまでの文脈によっておおよそ推し量られることだと思いが、現代の学問をめぐる論議は美術教育に限らず、錯綜している。大学と学問の関係からみれば、印刷が普及し、書物が大量に刊行される現代においても、学者は「学問的なタームを独占的に駆使

して学壇あるいは論壇というものをつくる」(浅沼圭司「書物の消失点」『書物の現在』書肆 風の薔薇)という文化形成における階層の問題を考慮する主旨の発想がある。一方には、知的水準の高い大衆の成立と発表機会の拡大、それに加えて商業主義の活性によって、「『世界』を読んでいればオピニオン・リーダーのいっていることが全部判る、という時代ではなくなってしまった」(古本隆明「『試行』の立場」 上掲書)のであり、『世界』と『MORE』が読者個人の興味・関心によって自由に取捨選択されてしまうのである。そのような世界はどのような媒体が学術的であり、どのような媒体がインフォメーションなりジャーナリスティックな情報の伝達媒体なのか区別する明確な指標を本質的にいって失いかけている世界である。そのような状況が良いというのではなく、十分留意しておかなければ学術という言葉に裏切られてしまうということである。商業主義・資本主義と言え、現代の学が急速に実利主義的な研究に傾斜していることに注意を喚起する論者もいれば、高度な商業主義が招いた情報化社会の、とりわけ映像的な情報を軸に、新たな学の世界のあり方を模索する論者もいる。後者の松浦は、学生に対して学問の扉を開く企画のなかで、「書物から学習しうる解説格子の、道具としての限界を強調する」だけでなく、「映画や絵画には『意味』を越えた『イメージ』の触覚的魅惑」をさえ説くのである。(松浦寿輝「レトリック」『知の技法』東京大学出版会)イメージの世界と論理性との普遍的な関係までは論及されていないが、写真集を例に解釈の方法論を提示している。いっばう、映像の氾濫と現代社会における重要性を「社会の変化と人間関係の変化によって、主要な媒体に変化が生じる」現象ととらえ、「広い意味での言語に付加された新しい層の一つとして」映像媒体をとらえるという論旨も見られる。(浅沼 前掲書)いずれにしても、様々な観点から一枚の絵や写真を分析し、隠れたイデオロギーなり意味なりを抉り出していくような知的作業が優れて学術的なものであるという社会一般の認識が醸成されてきたのである。また、これらの学の自問自答をいっそう巨視的にみると、学問と経験的な世界とのかかわりということに収斂していくであろう。この点については竹内啓の「人間生活と学問」(『学問における価値と目的』東京大学出版会)が平易な譬えを用いながら整理し、通俗的なアカデミズム信仰への警句の役割を果たしている。このような現代の学問が置かれた状況を前提にすれば、映像的イメージを対象にして考察する機会の多い当学会における論文形態については、形式的にも、内容的にもいっそうビジュアルな世界に道を開く方向が模索されるべきだろう。

このことは一例に過ぎない。投稿者、査読者、学会の運営にかかわる人々全員が、美術教育と呼ばれるわたしたちの研究の内容や形式が学術全般のおおよその動向に照らしてどのような質を備えているのかというような問題について、自覚的に自問自答する姿勢が必要である。美術教育という確たる学問領域が存在していると自負する前に、例えば、ある論文が心理学に傾いているならば心理学の、歴史学に傾いているならば歴史学の、哲学に傾いているならば哲学の、第一線で活躍する研究者を論文査読の重要なメンバーに加えるような努力が、そうした姿勢の具体化として求められはしまいか。会員の範囲内でも厳密な査読は可能だろうが、いっそう発展的に、会員外の専門的な研究者の学問的成果を導入する通路として、査読などの機会を与えることは有意義なことに思われるのである。

業績主義や権威主義を乗り越えて、のびやかな研究が生まれることを精神的な目標にして、当学会が魅力的な展開を続けることをわたしは期待している。すでにダイナミックな運動として「出前シンポジウム」(通称)を開催してきた学会の柔軟な動きをみれば、その期待は報われるにちがいない。

W・Eの会、ふたたび

上山 浩（大阪教育大学大学院OB）

まず、阪神大震災に罹災された皆様に心からお悔やみ申し上げます。その被害の甚大さには言葉ありませんが、これから紹介しますW・Eの会の思い出が神戸をその地として
いることだけに、いっそう深いものを感じております。

記憶があやふやで恐縮ですが、W・Eの会という言葉がはじめて使われたのは、1990年の秋のことだったと思います。教大協の大会が徳島で開催されたことを機として、大学院生や学部生そして若手の先生方や研究者など美術教育に関わる有志が神戸に会しました。それは単なる飲み会だといってしまえばそれまでですが、学会への関与の有無、出身校、信条の違いなどにこだわらず、思い思いに意見を交換し美術教育に対する情熱を語り合える場となりました。少なくとも筆者にはそう感ぜられました。W・Eの会との命名がどなたに依ったのかは失念しましたが、「西と東が会する」すなわち地域の違いを越えて、さらには組織の枠組を越えて美術教育に関わる忌憚のない意見交換のできる場、それがW・Eの会なのです。

W・Eの会は、けして偶発的に始まったものではありません。神戸での集まりは翌年の名古屋に引き継がれたわけですが、そういった状況に至るまでにはいくつかの出来事がありました。

W・Eの会の発想の根元は、1985年の夏にさかのぼることができます。当時神戸大学の院生だった竹井史市（現美作女子大学）より一通の葉書が大教大の院生宛に届きました。その内容は、関西の4大学の大学院生で研究会を作ろうという呼びかけ。その目的は広くオープンな研究交流の場と、成果の発表の場を作ろうというもの。当初この研究会は奈良教育大学を含めた3大学の院生の活動により発足しました。その時「美術教育に関わる会」という名称を決める話し合いに2時間余りを要したのを覚えています。時間を要した理由は、既成の組織や信条に影響されず、院生の独自のアイデンティティーを確保しようということにありました。具体的な活動は、我々が院生だった間に、何回か会合をもったことと、そのころ一般化し始めたワープロとコピー機をフルに活用し、研究誌を2回、研究対象を掲載した名簿を1回発行しました。この「関わる会」は、その後、関西だけでなく全国的に呼びかけを行い交流を広げていきました。その当時唯一博士課程を有していた筑波大学をはじめとして関東の大学院生も参加され全国的な院生名簿も作成されるに至りました。元々は研究交流の場でありましたが、むしろ人と人との交流自体の意義の方が大きかったように思います。

W・Eの会を具体的な会合に結びつけた出来事は他にもあります。1986年の晩秋だったように思います。当時、筑波大学の宮脇先生の呼びかけで筑波大学および横浜国立大学の院生などが自主的に関西を訪れました。その日程に大阪教育大学への来校も含まれていました。講義風景などを見学されたあと、分校主事室にて大教大院生らと歓談の時間をもつことができました。具体的なテーマは失念しましたが、かなり激しい議論を戦わせたことを覚えています。その日の夕刻、大阪の北で盛大な飲み会がありエールが交換されたことはご想像に難くないことと思います。

思い返してみますと、W・Eの会の背景には、血気盛んな若者の組織に囚われたくないという意志と、その動きを排除することなく、暖かく見守っていただき、さらには支援や励ましをいただいた先生方の眼差しがあったことが印象に残ります。

今年1995年春、和歌山大学の学会開催後、OB会も兼ねたW・Eの会がふたたび開催されます。ここ5年あるいは10年の間に美術教育を囲む社会状況は急激に変化しました。美術教育に限らず学校教育は今、激動の時期を迎えようとしています。このような時期こ

そ、単に既得権益の確保をめざすようなことなく、教育会の未来を切り開く新たなエネルギーがそこに必要です。院生の人口も増大しました。誰が集まり、どのような会話が交わされるか分かりませんが、過去を回想するのに終わらず、W・Eの会の精神、すなわち組織の枠組を超越して、実質的な交流を作っていくという精神が今後もエネルギーを失わないよう努力をしていきたいと思えます。

美術教育史研究部会の近況

金子 一大 (茨城大学教育学部)

1. 第1回研究会の報告

1995年 1月28日(土)、茨城大学教育学部美術科図書室を会場にして、美術教育史研究部会の第一回研究会が開かれました。

午前10時に開会し、金子が簡単なあいさつ、部会の方針、日程などの説明をしました。部会の方針とは、次のようなことです。

○「来る者は拒まず、去る者は追わず」。面白さと役立つことだけが構成原理。

○事務の繁雑さを無くすため通常会費はなし。本部からの補助金、研究会参加費、寄付その他代表者が調達するもので運営する。

10時20分から発表に移り、末武芳一氏(台東区立谷中小)の「川上冬崖と美術教育のあゆみ」、金子(茨城大学)の「寺内信一・内藤陽三の明治10年代常滑での彫刻教育」が発表されました。美術教育資料の収集と川上冬崖研究は、末武氏のライフワークで、氏の収集リスト「末武文庫目録」と、今回の発表のために印刷所に制作させた『川上冬崖年譜』が出席者に配布されました。その年譜に沿って川上冬崖研究の問題点が発表されました。金子の発表は、常滑に残っていた寺内信一の素焼きの裸婦像と内藤陽三の本焼きの「鯉江方寿像」から、常滑での二人の彫刻教育の意義、明治17年という時点での二人の西洋彫刻の技術の高さを確認しようとしたものです。

昼食後13時20分から参加者各自の研究対象や関心事を踏まえて自己紹介をしました。引き続き13時50分から、美術教育史の方法論という共通テーマで4人が報告しました。

1. 赤木里香子(岡山大) 「近代美術教育史の — 自然観の変遷を追って」

2. 向野康江(武蔵野美大) 「美術教育史と芸術教育思想史との関係 — 新しい美術教育の枠組を考えるために」

3. 新井哲夫(群馬大) 「戦後美術教育史研究の一視点」

4. 岡崎昭夫(宇都宮大) 「アメリカにおける美術教育史研究」

赤木氏発表の大要。大学時代に地理学を専攻、カルスト台地の地形発達史を卒業研究としたことから、地図や航空写真による全体(大きな構造)の把握と、フィールドワークでの部分の把握とを関連させることが自分の方法論の基礎になった。美術教育史研究では、近代日本において翻訳語「自然」が社会に浸透していった過程と、同じ翻訳語の「美術」のそれとは並行しているのではないかという推論に着眼しつつ、全体から部分へ、部分から方法へという方法を連結させたい。全体を俯瞰する必要があることを痛感している。

向野氏発表の大要。美術教育という概念だけでは、芸術教育的現象や思想は捉えきれない。例えば近世の文人画は、演劇のように総合芸術的なものであった。また広瀬淡窓の詩に関わる考えは、芸術教育の本質についていて、例えば今日の美術教育での鑑賞教育の方法を反省させる。芸術教育思想史という観点も美術教育史には必要である。

新井哲夫氏の発表の大要。戦後美術教育、特に美術教育における創造主義の考え方について、久保貞次郎を手がかりに研究している。戦後美術教育の問題点としては、理念と現実の乖離、さらには理念そのものの不備あるいは不在があげられる。その原因の一つとし

て、理念を提示する役割を担う学習指導要領に対する厳密な批判検討が欠けてきたことが考えられる。今後、指導要領をめぐるオープンな議論の場が保証される必要がある。自分としては、戦後の創造主義美術教育の理念の批判検討を通して、日本的特質を踏まえた美術教育論を模索したい。

岡崎昭夫氏発表の概要。アメリカの美術教育史を研究している。アメリカではリサーチやカリキュラム開発が下火になった1980年代に美術教育の歴史の見直しが始まった。ペンシルベニア大で今年第3回美術教育史会議が開かれる。徐々に研究は国際的な比較美術教育史に推移している。自分もアメリカの美術教育通史と日本のそれを比較して、共通する人名や事項の意味の差異を検討している。外国を見て日本を知るためである。

16時15分に4報告が終了し、討議に移りました。そこでは、対象との距離感と視野範囲の問題、比較文化史的考察の意義、美術教育実践への寄与を意識した美術教育史研究の必要、美術教育上の立場が研究には反映すること、現代における教養的・知的美術教育あるいは文人画的美術教育の可能性などが話し合われました。16時30分に討議を終了して水戸芸術館での見学会の予定でしたが、それを中止して17時少し前まで討議を続けました。その様子は当学会の前身のかつての奈良教育大学での研究会のようでした。

その後、これからの部会の方針と、3月末の美術科教育学会和歌山大会での部会発表の予定（向野氏が発表）を確認し、別室で記念撮影をして閉会となりました。

《研究会出席者リスト》 1.赤木里香子 2.新井哲夫 3.伊沢のぞみ 4.岡崎昭夫
5.熊本高工 6.花篤實 7.末武芳一 8.向野康江 9.瀧ヶ崎正彦 10.中川知子
11.西村四郎 13.宮坂元裕 14.山口喜雄 15.金子一夫 16.関根浩子 17.樋口雅子

会員トピックス

○東山明会員（神戸大学）の著書の中国語版が出版されました。

1986年に出版された『美術教育と人間形成』（創元社）が、王晓平・夏河の両氏の手で翻訳され、『孩子與美術教育』（子どもと美術教育）として、昨年10月に北京の林業出版から出されました。今年の1月6～15日には、北京で、出版記念式典・記念講演会などが催されました。「（中国では）日本の美術教育についての関心も非常に高く、今後の交流を望んでいましたので、（会員諸氏が）北京などに行かれるときには、いつでも紹介をします」との東山会員からの言葉です。

○長田謙一会員（千葉大）監修の“IZUMI WAKU project”の記録ビデオとCD-ROMが出ました。

昨年8月に東京都杉並区立和泉中学校で行われ、「中学校を美術館に変えた！」試みとして反響を呼んだ「いずみわくプロジェクト」の記録が、同校美術教師の村上タカシ氏の制作、長田氏の監修で出版されました。「村上氏をはじめアーティスト、中学生、教師、父母、学区民、美術関係者、学生等の様々な人々の集う中で実現したこのプロジェクトは、学校を街を、そこに关わる人々共同の『美術の現場』に変えた。このCD-ROM、ビデオも単にそのドキュメントにとどまるのではなく、むしろそれ自体美術の湧き出る『現場』=IZUMIを若い世代と共有しようとするものだ。」（長田氏談）。ビデオはVHS60分で9800円、CD-ROMは7,000円。問い合わせは 〒106 東京都港区西麻布 2-36-7「メリックス」へ。☎03-3406-7930 Fax.03-3 409-8770。

会費納入のお願い、会計年度が変わりました。会費の納入をお願いします。振込みは「郵便貯金総合サービス」用の振込み通知票で下記の口座まで。

【口座番号】10050-64710321

【加入者名】美術科教育学会本部事務局 会計担当 増田金吾